

# 口腔病学会共催 歯学部新教授による講演会のお知らせ

2020年10月28日(水) 17:00~19:00

**Zoom 配信のため、事前登録が必要です**

## 『摂食嚥下リハビリテーションのこれから』

戸原 玄 教授 (摂食嚥下リハビリテーション学分野)

摂食嚥下リハビリテーションは現在では広く行われているようになったが、ここ20年で発展してきた新しい分野である。当初は急性期や回復期の入院患者が主な対象で、研究も嚥下機能の解析と評価手法の整備のようなものが多かった。我々は在宅への介入の重要性を示し、さらに社会資源を積極的に増やすような活動を行うだけでなく、新たな訓練法、評価機器の開発や、経口摂取の意味合いを再考している。今後の可能性を踏まえてご紹介させていただきたい。

## 『神経回路形成機構の解明に基づく咀嚼嚥下機能の理解』

上阪 直史 教授 (認知神経生物学分野)

動物の発達期に脳神経回路が形成される。最初に創られる神経細胞同士の結合(シナプス)は未熟でかつ成熟脳で見られるより過剰に存在している。発達に伴い、一部のシナプスは強められて残り、他のシナプスは除去される。この過程は“シナプス刈り込み”と呼ばれており、脳が未熟な状態から機能的な状態への変化するために必須である。シナプス刈り込みは嚥下咀嚼機能の発達と関連する可能性があり、私たちはこの可能性を検証し、咀嚼嚥下機能の発達・情報処理・運動制御のメカニズムを明らかにしたいと考えている。

## 『細胞外環境が司る細胞運命決定』

岩本 勉 教授 (小児歯科学・障害者歯科学分野)

われわれは1つ1つの細胞の集合体からなる多細胞生物です。1つの細胞はとても小さく脆弱ですが、これらが集合することによって、強靱な生命体になります。細胞は常に隣り合う細胞、時には遠隔の細胞と相互作用しながら、あるいは様々な外的刺激を受けながら取りながら、その細胞運命を決定していきます。これまで歯、骨、軟骨を中心として、細胞外環境と細胞運命決定の機構について研究を行ってきましたので、その概要について報告させていただきます。

## 『多様な疫学研究の可能性』

相田 潤 教授 (健康推進歯学分野)

疫学は人間集団の健康状態を把握したり、人々への治療結果を客観的に評価するのに用いられる。質の高いエビデンスは人を対象にした疫学研究から生み出されている。そのため疫学はすべての臨床医や公衆衛生従事者の日々の仕事に関係しており、この幅広い保健医療領域をカバーすべく、臨床疫学から社会疫学まで多様な研究手法が開発されている。こうした手法を理解すれば、臨床や公衆衛生の日々のデータから、疫学研究を生み出せる可能性も存在する。本演題では幅広い疫学研究を紹介し、その可能性を考えたい。

QRコードより登録の方に当日ZoomミーティングIDをお送りいたします。  
本学の機関登録をしたZoomIDでログインしてください。



※問い合わせ 歯周病学分野 岩田隆紀・水谷幸嗣  
(内線) 5488 [mizuperi@tmd.ac.jp](mailto:mizuperi@tmd.ac.jp)